

機能分化と再帰的な公共圏の形成

東京工業大学 後藤 実

1 目的

この報告の目的は、グローバル化する近代において、格差が問題化する中で、人間の幸福、連帯がもたらされておらず、生活条件の平等化も達成されていないという N.ルーマンの指摘を踏まえて、公共圏の形成によってこれらがどのように主題化されるのか、彼の社会システム理論を敷衍しながら検討する。本報告では、ルーマンが言及している包摂領域／排除領域の分化の蓋然性を念頭に置きながら、後期近代では、公共圏の機能が多元化していることを問題化し、諸社会理論相互の共作用の可能性もあわせて探る。

2 方法

ルーマンは、機能分化に関して、移行、特徴、帰結を主題化しているが、機能分化の帰結がもたらしている失敗に対する問題解決の提案というよりは、機能分化への移行に伴う環境の変動への対応能力とその自己記述を重視している。これに対して、本報告では、問題解決か自己記述かの二者択一ではなく、機能分化が社会構想のためのリソースを摩耗させていることに着目し、その帰結が引き起こす問題がコミュニケーションによって主題化されるという別様の視座から現実にアプローチし、再帰的な公共圏の多元的な機能を吟味する。このことを分析の俎上に載せるために、(a)反省する意味論、(b) 過渡期としてのネーション、(c)空間的統合の廃棄、(d)近代社会の存続上の危機を機能分化の優越性に照らして考察する。

3 結果

社会的部分システムにとっての環境という考えに沿って、ルーマンは公共圏を晩年に論じつつあったが、環境変動に対応するために、刺激を高めていく先に機能分化の構造的適応能力の限界に突き当たってしまう事態を想定し、観察者＝警告者というカテゴリーを設けた。これは有力なシナリオの一つではあるが、これに対して、分析の結果、(a)(b)に着目し、理性の水準の再吟味、合理性の細分化によって確保される公共性及び(c)(d)を念頭に置いて幸福、平和、環境維持等に関わる価値のコミュニケーションがセカンド・オーダーの観察によって展開されることで形成される公共圏が見出された。この再帰的な公共圏の機能システムに対する作用を検討することで公共圏の機能の複数性が明らかになった。

4 結論

以上から、機能分化への移行を受けとめる方向性のもとでの公共圏の多元化と、機能分化への反作用を契機とした公共圏の多元化との相違が明確になった。本報告で議論してきた公共圏の多元化は後者に関わる。機能分化の優越性の下で、各機能システムに対応したコミュニケーション・メディアとは異なるシンボリック・メディアが分出し、これが公共圏の形成におけるメタレベルの参照点として機能する蓋然性が高まっていると言える。このようなさらなる公共圏の進化によって、社会構想、改良といった方策に、シンボリック・メディアの形成、流通(受容／拒否)、対抗的メディアの形成といった契機が加わると考えられる。

文献

Luhmann, N., 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

(=2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会 1・2』法政大学出版局.)